

(6) マチネ・ポエティック

加藤の青春時代は詩歌によって彩られる。好んで内外の詩集を読み、詩歌を詠んだ。加藤も多くの詩歌を詠み、「藤沢正自選詩集」を編み、『青春ノートV』に挟み込んでいる。

「類は友を呼ぶ」、おのずと同好の士が集まり、それぞれの詠んだ詩歌や書いた小説、評論を朗読する会を始めた。1942(昭和17)年秋のことである。同好の士であるから、詩歌の好みも共通し、時代に対する態度もほぼ共通する。フランス文学が好きで、戦争に対しては疑問、もしくは批判的態度をとる人びとの集まりであった。

同好の士は、加藤のほかに、福永武彦、中村真一郎、窪田啓作、原條あき子、白井健三郎、中西哲吉、山崎剛太郎、枝野和夫らである。「マチネ・ポエティック」の命名者については諸説あって、正確にはわからない。

彼らは月に1度、主として加藤の家に集まって、自作の朗読を行なった。同人誌はもたなかったが、おそらく用紙統制が厳しくなっていたからだろう。

彼らがもっとも関心の高かったのは、押韻定型詩である。それはフランス詩歌からの影響でもあり、九鬼周造「日本詩の押韻」に触発されたともいえる。

彼らが詠んだ詩歌は、戦後になって『マチネ・ポエティック詩集』として出版された。しかし、詩壇からは批判され、大きな運動にはならず1950(昭和25)年に終わった。